

Ⅲ 学習方法

幼児児童生徒の実態及び関心・意欲に基づいた人権教育を効果的に進めるためには、内容に応じた学習方法の検討が重要です。これまで同和教育が培ってきた手法に加えて、国際的な人権教育の潮流の中で、現在、多種多様な学習方法が導入されています。したがって、それらの特性や学習指導上の留意点を踏まえながら、最も適切な学習方法を選択するようにしなければなりません。

特に、幼児児童生徒が人権問題を直感的に捉え、人権への配慮が態度や行動に現れるような人権感覚を育てる視点から、人権教育の学習方法を充実・改善していく必要があります。人権感覚は、幼児児童生徒が学習に主体的に取り組むことを通して培われるものです。また、自他を尊重する学習環境の中で身に付いていくものです。

よって、人権感覚を育て、人権尊重の精神を養うためには、幼児児童生徒が自分で考え、感じ、活動するという主体的・実践的な学習方法を多く取り入れるようにしなければなりません。

Ⅰ 様々な学習方法と指導の工夫

○ 文章教材を活用した学習

副読本等に掲載されている文章教材を中心資料としたり、補助的に用いたりしながら、学習を行うものです。多様な事例を提示でき、人権問題に対する基本認識を身に付けさせたり、共感的に理解させたりすることができます。

指導に当たっては、読み取り中心や知識偏重にならないよう工夫したり、幼児児童生徒の発達段階や実態及び文章教材の書かれた社会背景、時代背景を考慮して選定したりする必要があります。

副読本として、下記の資料を積極的に活用してください。

「人権啓発資料―ファミリーふれあい―」（小学生・中学生・高校生用）

教育ネットひむかホームページ：人権同和教育課のサイト内

<https://himuka.miyazaki-c.ed.jp/family/index.htm>

「はぐくむ―指導展開例集（小学生用：同和教育基本資料）―」

「人として―指導展開例集（中学生用：同和教育基本資料）―」

「人として―指導展開例集（高校生用：同和教育基本資料）―」

○ 視聴覚教材を活用した学習

DVD等の視聴覚教材を活用した学習方法です。教材の視聴に終始することなく、事前・事後の学習を充実させ、人権尊重に関する知識・価値観・技能を培うようにすることが大切です。

○ 聞き取り学習

地域の人々や家族などから体験や様子を聞き取ることにより、課題を身近なものとすることができます。

○ 交流、職場体験などの学習

地域の公民館、児童館、福祉施設等での交流学习や企業等での職場体験学習の中で、様々な人々との出会いを通して学習します。社会への視野を広げるとともに、人や社会とのつながりについて体験的に学ぶことができます。

○ 参加体験型学習（ワークショップ）

学習者自身が自らの知識や体験をもって、グループで話合いや体を動かす活動に主体的に参加し、それぞれが自分の気づきや考えを表現したり、他の人の気づきや考えを聞いたりする中で問題について認識を深めていく学習活動です。

2 学習教材の選定・開発の留意点

○ 幼児児童生徒の発達段階に即して、自ら考えることのできる内容であること

内容が発達段階に即したものであるとともに、幼児児童生徒が正しく理解し、共感できるものでなければなりません。

○ 偏見や差別を見抜き、許さない心情や態度の育成につながる適切な内容であること

教材が、単に同情心をあおるだけのものであったり、好奇心から新たな偏見や差別意識をもたせたり、プライバシーの侵害につながったりするようなものであってはなりません。人間として望ましい生き方や科学的・合理的なものの見方、考え方を育てるとともに、人権意識を高め、あらゆる人権問題の解決への展望を示唆する内容であることが大切です。

○ 幼児児童生徒の生活上の課題に配慮されたものであること

一人一人の幼児児童生徒の心身に関わる配慮すべき事情や家庭環境、置かれている状況をよく理解した上で、教材としての適否を判断したり、改善したりしなければなりません。

○ 系統的な指導の観点から検討されたものであること

資料や事例を教材として取り上げるかどうか、また、どのように取り上げるかは、学校（園）における人権教育年間指導計画との関わりにおいて慎重に検討されなければなりません。そして、全職員の共通理解に基づいて指導方針を確立し、指導の系統化を図るように留意することが必要です。

3 参加体験型学習（ワークショップ）

（1）基本的な学習の進め方

① アイスブレイキング（緊張ほぐし）

ファシリテーター（進行役）は、これから始める参加体験型学習のねらいを説明し、アイスブレイキング（氷を壊すという意味）を行います。学習者の緊張感をほぐし、主体的に参加できる雰囲気づくりに必要な活動です。



② アクティビティ（学習活動）

アクティビティとは、学習活動のことです。ねらいを達成するために、学習者が意欲をもって取り組むことのできる活動を設定し、効果的な組み合わせを考えます。

アクティビティには、ロールプレイングやディベート、フォトランゲージ、シミュレーション、ランキングなど多種多様なものがあります。



③ グループ討議

アクティビティでの気づきなどをグループで話し合います。

互いの気づきや考えを表現し、共有しながら学習内容を深め、必要に応じて、グループごとに話し合ったことを模造紙等にまとめます。



④ 発表

グループごとに発表します。ファシリテーターはそれらを整理したり、発表内容に対する意見を求めたりします。



⑤ まとめ（全体のふりかえり）

学習者は、全体を通して分かったこと、理解が深まったこと、発見したことなどを発表し合います。

最後に、ファシリテーターは、本学習で大切なことを再度押さえるようにします。内容によっては、新しい課題を指摘するなどして終わることも考えられます。

〈ファシリテーターとして心がけたいこと〉

- ・ 学習のねらいを明確にして、常に念頭に置き、学習活動そのものが目的となることのないように留意する。
- ・ 聞く、話す、書く、考える、発表するなどの活動をバランス良く取り入れる。
- ・ 学習者相互の意見交換の場を計画的に設定する。
- ・ 一人一人の意見や考えを否定せず、互いの気づきや考えの深まりを大切にするよう促し、安心感のある運営を行う。
- ・ 学習者の主体的な学びや気づきの妨げになるような指示等はしない。
- ・ 自らも学ぶ態度で臨み、学習者の立場で考える。

(2) いろいろな手法

○ ロールプレイング

役割演技とも呼ばれ、ある場面に基づいて役割を決め、模擬的に演じることによって、学習のねらいに迫ったり、その役の立場を共感的に理解したりする手法です。基本的には、台本を用意せずに学習者に活動を委ねます。

実態に応じて、大枠の流れを示す会話や状況を指導者側で準備したり、事前に学習者に演技の内容を考えさせる場を設定したりすることも必要です。

○ 表現活動を取り入れた学習

調べ学習や様々な体験学習で学んだことを、新聞、紙芝居、人権作文・ポスター等にまとめ、発表することなどを通して、内容を共有することができます。

○ ディベート

一つのテーマについてルールを決め、「肯定側（賛成派）」と「否定側（反対派）」に

分かれて討論を行い、その論理性や表現力等を判定する手法です。

グループの人数や発言時間が同じであること、発表順序が肯定側（第1弁論）→否定側（第1弁論）→（作戦タイム）→（中略）→否定側（最終弁論）→肯定側（最終弁論）となることなどのルールがあります。対立する意見を主張し合うことにより、テーマに関するメリットとデメリットを明らかにし、多面的な見方や問題解決能力、情報処理能力を養いながら、テーマに対する認識を深めることができます。

○ ブレインストーミング

テーマに対して一人一人が自由に発言し、それらを組み合わせたり、別なアイデアを出したりして、問題解決を図る手法です。その際、他者の意見を批判しない、どんな意見でも多数出す、多くの意見やアイデアを組み合わせることなどを原則としています。

○ フォトランゲージ

あるテーマに関する写真や絵をもとに、それらの資料から伝わるメッセージを描かれている人の立場から読み取り、今まで自分が気付いていなかった事柄を発見したり、学習者相互の価値観の違いに気付いたりしていく手法です。

○ シミュレーション

疑似体験とも呼ばれ、一定の状況を疑似的に設定して、その中で体験的に行動、活動する方法です。アイマスク体験や車椅子体験、参加者の中に仮の権力関係を設定して多数者と少数者の関係について体験する方法など、様々な疑似体験が考えられます。

○ ランキング

様々なテーマについて、権利や具体的物品名等をカードに記入し、参加者が自分にとって重要と考える順序にランキング（順位付け）して、その根拠等を整理し、結果について参加者相互が意見交換や討議を行います。討議のプロセスでは、一つの結果を導き出すということではなく、自分の考えを整理したり、他者の考えを理解したりすることによって、自分自身の認識を深めることができます。

○ フィールドワーク

実際に現地に赴き、歴史的事実や現実から学ぶ活動です。過去の人々の生活や生き方を想像したり、事実を事実として自らの中に取り入れたりすることができる手法です。

副読本として「人権教育ハンドブックー小学校編ー」、「人権教育ハンドブックー中学校・高等学校編ー」を活用してください。

4 コミュニケーション能力を高める学習

幼児児童生徒は、毎日の学校（園）・家庭・地域社会における生活の中で、人権尊重に関する知識・価値観・技能を身に付けていきます。このような知識・価値観・技能は、本来、家族や友達、地域の人々との日常的な交わりの中で、自然に身に付けていくものです。しかし、家庭でも地域社会でも人間関係は希薄化し、生活における様々な体験を通して人間関係の基本的な知識・価値観・技能を学ぶ機会は減少しています。その結果、人との関わり方を知らない、または、関わり方は知っていても実践する能力や態度が身に付いていない幼児児童生徒が増えています。

したがって、これからは学校教育の中で、幼児児童生徒に適切な人間関係づくりについての基本的な知識を教えたり、人間関係に関する一定のルールやマナーを身に付けさせたりする必要があります。また、人間関係から生ずる問題を解決する方法や、伝え合い分かり合うためのコミュニケーション能力などを、参加体験型学習やスキル学習を通して身に付けるようにすることが求められます。

コミュニケーション能力とは、考えや気持ちを適切かつ豊かに表現し、また、的確に理解することができるような力です。自分の気持ちを伝えられることが、人権や差別の問題について理解を深めたり解決したりする基盤となります。そして、人の思いを分かろうとすることが、他者の権利に関心をもつ出発点になるのです。こうしたコミュニケーション能力は、異なる文化や考え方をもちた人々と交流する上でも大切です。

(1) 自分の思いや考えを伝える力を身に付ける学習

人には、自分の気持ちや考え、意見、希望を率直に表現することができない場合があります。例えば、「相手を怒らせてしまわないか」とか「どう答えてよいか分からない」など、言いたいことを言えないという場合です。また、言った後に「どうも自分の言い方は相手を怒らせてしまったようだ」と感じる場合があります。どちらも相手との関係も対等であるとは言えず、自分の気持ちがうまく伝えられていません。

そこで、互いの関係を損なわずに、自分の思いや考えを伝えるための自己表現の方法として、アサーティブネスの考え方があります。

アサーティブネスとは、自他を共に大切にしたい自己表現のことで、自分の思いや考えを、率直に正直にしかも適切な表現で相手の人格を尊重しながら伝えることです。

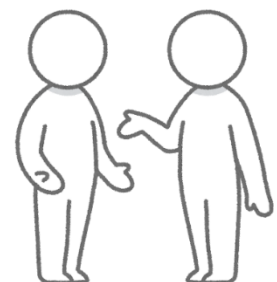
ア アサーティブネスで踏まえること

アサーティブネスでは、例えば「誠実」「率直」「対等」「自己決定と責任」という観点を踏まえた上で、人と向き合い、よりよい人間関係をつくっていくことが求められます。

○ 誠実

「誠実」とは、自分の気持ちにうそをつかず、相手にも正直に自分の気持ちを伝えることです。

自分の気持ちにうそをつかないことが、自分にも相手にも誠実であるための第一歩です。



○ 率直

「率直」とは、自分の気持ちや要求を相手にきちんと伝えるように表現することです。伝えたいことを、相手にはっきり分かるように、分かりやすい言葉で、「私はこうしたい」「こうしてほしい」「これはいやだ」ということを、具体的に伝えることです。

○ 対等

「対等」とは、相手と向き合うときに、自分をむやみに卑下したり、相手を見下したりして話をせず、自分も相手も尊重することです。言いやすい人ばかりに言いたいことを言うのではなく、誰に対してもどの場面においても、誠実に伝えるということが原則です。

○ 自己決定と責任

「自己決定と責任」とは、自分の行動の結果を自分で引き受けるということです。自分で考え、自分で選択する力がある、ということを信じるのが基本であり、「自分の言ったことには責任をもつ、言わなかったことを誰かのせいにはしない」ということもできます。

イ 自己表現の三つのパターン

攻撃的な自己表現	アサーティブネス (非攻撃的な自己表現)	非主張的な自己表現
相手の気持ちを考えず、自分の気持ちを優先させ、自分の言いたいことだけを言う。	相手の気持ちを大切にしながら、自分の言いたいことを主張する。	相手に対して自分の言いたいことを言えない。または、言わない。

ウ I (わたし) メッセージを基本にする

アサーティブネスの一つの方法として「I (わたし) メッセージ」があります。対立が起こったときに、「あなたが〇〇だから」「あなたって人は全く〇〇なのだから」といったように「You (あなた)」を主語にして話し、結果的に相手を非難していることが多くあります。言われた方は、自分が非難されていると受け止め感情的になり、譲り合おうという姿勢がなくなり、衝突が起きてしまうことがあります。

「I」を主語にして話すと、相手に受け止めてもらいやすくなります。「Iメッセージ」は、相手の反感を買うことなくスムーズに自分の思いや考えを伝えることができるコミュニケーションの方法です。

〈Iメッセージの表現の仕方の例〉

① 事実の確認

「おなか痛くて約束の時間に来ることができなかったのね。」

② 自分の気持ちの伝達

「あなたがなかなか来ないので、事故にでもあったのではないかと、私はとても心配したのよ。」

③ 行動変容への提案

「今度から、遅れるときには、必ず電話してね。」

エ アサーティブ・トレーニング

アサーティブ・トレーニングとは、実践的なロールプレイングを繰り返しながら、自分の要求と感情を適切に表現する方法を身に付けていく練習です。

アサーティブネスを理解し身に付けるためには、これまで自分が行ってきた思いを伝えるための表現の仕方に気付くことが大切です。

アサーティブネスを日常から心掛けたり、アサーティブ・トレーニングを積み重ねたりする中で、確かな技能が身に付き、より望ましい人間関係を築く力が培われます。

【演習～Iメッセージで考えてみよう～】

- ① 水を飲む順番を待って並んでいました。すると、Aさんが割り込んできました。
- ② 勉強をしようと思っていたテストの前日の放課後、Bさんが突然ノートを借りにきました。
- ③ 隣に座っているCさんが、黙って消しゴムを使いました。
- ④ DさんがEさんの本を取り上げて、いじわるをしています。
- ⑤ Fさんから遊びに誘われましたが、今日はどうも気が乗りません。

(2) 聞く力を高めるための学習

「聞く」ことで大事にしたいことは、「自分のための情報として聞く。」「批判的な気持ちで聞く。」など自分中心的な聞き方をするのではなく、「相手の言うことを理解しようとして聞く。」ことです。相手を理解するように聞くことを心掛けていくことは、コミュニケーションの活性化を図る上でとても重要なことです。意識的に集中して相手の話に耳を傾けて聞くときには、「聞く」ではなく、「聴く」という文字を使用する場合があります。幼児児童生徒には、そのような「聞く力」を育てることが望まれます。



〈傾聴〉

参加体験型学習の中に、「傾聴」という、共感的に聞く姿勢を高めるトレーニングがあります。傾聴では、例えば二人一組で、一方は話す側、一方は聞く側になって、1分間ずつそれぞれが「話す」「聞く」という行為に集中するようにします。そして、役割を交代してそれを繰り返します。

ファシリテーターは、聞く側が、「心を傾ける」「体全体で共感を表しながら」「質問は一切しない」という三つのルールを守りながら聞くことに集中するように意識付けを行うことが大切です。聞いているつもりでも、実際には相手に心が集中していない、途中で質問したくなる自分に気付くなど、自分自身が普段どのような聞き方をしているか振り返ることにもつながります。

聞く力も技能の一つですから、身に付けるためには繰り返しトレーニングをすることが必要です。